

平成 30 年 9 月 6 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381125

研究課題名(和文)3種のバカロレアに見る知の体系と社会化ーIB, BAC, OIB

研究課題名(英文)Comparisons of Three Baccalaureate Programs: IB, BAC and OIB

研究代表者

渡邊 雅子 (Watanabe, Masako)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：20312209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はグローバル人材を育成する「国際バカロレア(IB)」と、フランス市民を育成するフランスのバカロレア、バイリンガル・バイカルチャー人材を育成するフランスの「国際オプションバカロレア(OIB)」という目的が異なる3種のバカロレアプログラムの比較を通して、教育における知のグローバル化とローカル化がいかなる形で進行しているかを明らかにし、日本で導入が推奨されている国際バカロレアの日本版IBの提案、すなわちグローバルに活躍できる日本人育成のためのプログラムの理論と実践の提案を行った。IBのコア科目である「知の理論」の日本語での実践と、東アジアの知の伝統の導入を通じた知の相対化プログラムを提案した。

研究成果の概要(英文)：This study aims at clarifying how globalization and localization in school knowledge has advanced by comparing three baccalaureate programs;1. International Baccalaureate (IB); 2.French baccalaureate; and the Option International Baccalaureate (OIB). Analyzing the characteristics of these three types of baccalaureates, this study proposed localized IB which aims at nurturing persons who can adopt globalized world but have a firm local root. In localized IB, Theory of Knowledge(TOK) and academic subjects are taught in Japanese, and students work by group but are evaluated individually with essay writing. In addition to TOK, East Asian philosophies are introduced to the students for realizing knowledge.

研究分野：社会学

キーワード：国際バカロレア (IB) 国際オプションバカロレア(OIB) フランスのバカロレア 知のグローバル化とローカル化 日本型国際バカロレア (IB) 知の理論 (TOK) 知の相対化と能力

### 1. 研究開始当初の背景

モノと人と情報が一国の枠組みを超えて行き交うグローバル化の進展に伴い、「近代」の学校教育の見直しが行われている。グローバル化、ポスト近代と呼ばれる時代に学ぶべき知識とはどのように体系付けられ、いかなる方法で教えられるのか、どのような能力が求められ、社会の成員として機能するために児童・生徒は学校でどのように社会化されるべきなのかという学校の基本的機能の再定義が様々な形で行われ、その中で「新しい能力観」や国というローカルな枠組みを超えたカリキュラムの編成や言語の使用が検討されている。国家のアイデンティティー形成のための共有された知識・教養への要請とグローバル化した経済活動に組み込まれた知識運用の技術と能力の要請のバランスをどう取るのか。公教育において「個人化」と「経済化」が進み、文化的アイデンティティーの危機が叫ばれる中で、いかに価値ある知識と能力を特定し、権威付け、分配するかが教育と社会の中心的テーマになっている (Pinar 2003)。しかしながら、ローカル (ナショナル) な文脈と切り離された教育はどのように可能であろうか。学校で教えているのは様々な知識や技術のみではない。そこでは知識・技術を理解するための「枠組み (schema)」や、所属する社会集団で常識とされる思考法やその表現法の規範、行動パターンを明示的あるいは暗示的に教えている。こうした「潜在的カリキュラム」の修得が、顕在的カリキュラムの修得を可能にし、さらには児童・生徒を社会に送り出す重要な準備となる (渡邊 2010)。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバル人材育成のための「世界標準のカリキュラム」と言われる国際バカロレアと、「フランス人になる」ための通過儀礼と考えられているフランスのバカロレア、そして日本の内容をフランスの方法で試験する国際オプションバカロレアの3種のバカロレア比較を通して、知のグローバル化とローカル (ナショナル) 化がいかなる形で行われているのかを明らかにしつつ、それらの融合の可能性を探る事にある。各プログラムの知の体系と教育方法、能力観や生徒の社会化、社会との繋がりを調査によって明らかにしながら、日本への導入が試みられている国際バカロレアプログラムの理論化と具体的な在り方の提案を行いたい。

### 3. 研究の方法

本研究は、3種類のバカロレアの試験内容とその準備教育及びそこで行われる生徒の社会化を比較することにより、教育におけるグローバル化とローカル化はいかに行われているのかを認知レベル：試験問題の比較分析、制度レベル：試験準備教育の観察調査、社会レベル：生徒の社会化と進路の視点から実証的に明らかにすることを目的とする。調査においては、特にどのようなリテラシー (思考

とその表現法) が各バカロレアで養われているのかをプログラムの中の「書く訓練」に注目して行うとともに、フランスの哲学とそれをモデルにした IB の TOK の知の体系の形の違いを分析する。比較の軸としては、フランスのバカロレアと国際バカロレアを2項対立で分析した後、国際オプションバカロレアのオプション部分の特徴を見ていく。

具体的には、フランスの普通バカロレア (L/ES/S) と国際バカロレアの特徴を、枠組み (試験の形式と内容)、質問形式のパターン・問題数、試験時間、求められる情報・知識の質 (一次情報なのか、加工の必要な二次情報なのか、何を推論するのか等)、情報・知識の表現法 (知識・情報の組み立て構造) の3点に注目して比較分析を行う。の表現法は、フランスバカロレアにおける「フランス式論文 (dissertation)」と、国際バカロレアにおける「課題小論文 (essay)」の比較分析を中心に、2つのバカロレアの主として文学で使われる「コメント (commentaire vs. comment)」と仏の新しい論文の書き方である創作文「Écriture d'invention」も対象とする。フランスバカロレアについては、文学及び哲学の過去問題集及び攻略本 (日本の『傾向と対策』に当たる本) の最新版を過去3年に遡って収集する。国際バカロレアについては、TOK と文学の問題に関する文献 (例えば田口雅子, 2007, 『国際バカロレア-世界トップ教育への切符』松柏社等) 及びインターネットに公開された問題を分析する。国際オプションバカロレアについては、OIB 実施校から過去の問題 (日本文学) を入手し、からの観点に沿って同様に分析を行う。特にについては日本語になることによる普通バカロレアとの違いに注目する。また日本のセンター試験との問い及び情報の編集の仕方の違いも視野に入れる。

### 4. 研究成果

ここでは、研究の最終目的として挙げた日本への導入が試みられている国際バカロレアプログラムの理論化と具体的な在り方の提案を記す。

まず3種のバカロレア (フランスの Bac, フランスの国際オプションバカロレア OIB, IB) の 1) 目的、2) 内容的特徴、3) 言語を、プログラムに関する著作を手がかりに特定し、そこに日本のローカル IB がどのように位置付くかを示す。IB の特徴は、グローバル人材の育成を目指して、英語を主たる媒介として教科をリサーチと課題論文で評価し、TOK で知識の相対化を行い、CAS で実社会との接点を持つところにある。それに対してバカロレアはフランス人の育成 (フランス市民の育成) を目指しており、その教育目標達成の核になるのは、フランス式小論文に現れる思考の様式である。フランスの中等教育修了と大学入学資格を兼ねるバカロレアの人文科学系の科目はすべてディセルタシオンと呼ばれるフランス式小論文で書かなければならない。

(文学や哲学には他の様式もあり、教科によって書き方は多少異なるが、基本となるのはこのディセルタションである)。このフランス式論文の習得、つまり弁証法で書き、語り、考えること、その際に歴史を中心とした共通教養の厳密な引用ができることが「フランス人になること」と捉えられている。フランスの初等・中等教育のすべてのカリキュラムは、このフランス式論文が書けるようになるために綿密かつ段階的に組まれていると言っても過言ではない。実際このフランス式論文が書けないと、フランスでは中等教育の修了資格も、大学に行くことも、職を得ることも出来ない。論文を書くことを通してフランス人になるという考え方は日本では想像しがたいが、実は日本の綴り方に代表される子どもの作文も受験用小論文も日本の思考様式を見事に体現している。

それに対して、フランスのバカロレアの選択肢のひとつとして設けられた国際オプションバカロレア(OIB)は、フランスと生徒の母国のいずれの社会でも高等教育を受ける機会を与え、職を得ることが出来るような、バイカルチャー・バイリンガルの人材育成を目的にしている。OIBは日本では国語にあたる文学と地理・歴史を生徒の母国の言語と内容で試験するが、その際にフランス式論文の形式で書くことが特徴である。オプションと命名されているが、OIBがフランスのバカロレア資格と認定されるのはそのためである。文化的な素養を形成する国語・文学と地理・歴史の内容と言語は生徒の母国のものでも、その知識をどのような形式に収めるかは、フランス式でありフランスの思考法と様式の型に入れて表現しコミュニケーションすることが求められている。フランス語以外の言葉と知識内容で論文が書かれたとしても、エッセンスはフランス式であることがわかる。

さてこうした3つのバカロレアの教育目標と内容に対して、日本発のローカルIBはどのような特徴を持つのか。まず目標は、「グローバル化に対応した日本人の育成」であり、その内容としてはIBの本質を体現するTOKと教科の内容は日本語で教える。つまり体系化された知識とその相対化は、母語で行い、母語で知識の体系とその全体像を把握する枠組みを作る。総合的な学習の時間等でよく行なわれる「調べ学習」は、日本の学習指導要領で推奨されているようにグループで協働して行う。このグループで調べ、かつ協働してその結果をまとめるということが日本の学習方法の最大の特徴である。その中で調整の能力や役割を自ら創りだす高度な社会的な能力が養われる。欧米ではグループで調べることはあってもまとめの作業は個人で行い評価されることが多い。子どもの社会化にとって重要な初等教育では、グループですべて協働して行うことは継続して行い、中等教育段階ではグループで調べ学習

は行いながらも、その結果を個々でエッセイの形式で書かせるようにすると高等教育への準備ができる。高校の英語の授業でエッセイの書き方を教える学校は多く、その時にエッセイの書き方を通して英語圏の思考様式を教えることが重要だと考えられる。大学入学時のアンケートで、英語の時間にエッセイの書き方を習うことによって、日本とは異なるものの考え方を知り、日本とは異なる社会化がそこで行われたと感じる学生が多く存在した。高校で、英語と日本語両方でエッセイの形式で調べ学習の結果を個々に書かせれば、多様な知識のメニューを日本語で習得しつつ社会の中で協働でき、国外でも思考様式を共有してコミュニケーションできる人材を育てる事が可能になる。国際バカロレアの「知の理論(TOK)」においては現実社会への適応の部分が強調されるが、学校では各教科にあたる知識の体系を相対化して考えることは近代の学校では決して行われなかったことであり、これこそがポスト近代の考え方のエッセンスを体現している。初等教育で学んだ日本の起承転結や体験的な作文、英語とともにエッセイの書き方を教えれば、国外でも思考様式を共有してコミュニケーションできる人材、さらに言えば必要に応じて、知識の創出方法と、その表出の方法を戦略的に使い分けることができる人材の育成に貢献できると考えられる。

この理論と方法がポスト近代時代の和魂洋才モデルとして他国への適用も可能であると考えられるのは、明治の近代化においては「科学的知識と技術」が「洋才」に該当したが、ポスト近代においては、コミュニケーションの基礎となる「書く・語る・討論する」様式がそれにとって変わると考えられるからである。その際に、英語とアメリカ式エッセイを丸ごと適用するのではなく、まずは自国の「書き方・語り方・討論の仕方」を自覚しそれらを初等教育でしっかり児童に内面化させた上で、それら自国のコミュニケーションの様式に照らしてアメリカ式エッセイの論理性やコミュニケーションの特徴を相対化することが重要であると考えられる。

和魂洋才は、「融合」を定義としているが、自国独自のものの考え方や道徳観と、海外の技術を明確に分離したところにその特徴と成功の鍵があった。ポスト近代においては、自国語で知識の習得と濃密な議論が可能になった上で、外とゆるやかに繋がるモデルが推奨される。グローバル化の中で、英語による高等教育が行われたり、海外に繋がるプログラムと自国に留まる生徒用のプログラムが一国の中で峻別されたりする現代だからこそ価値を持つ日本発のローカルIBである。

ローカルIBでは社会化で重要な初等教育は従来通り行い、前期中等教育からエッセイ形式(日本語)で課題を書かせ、後期中等教育でTOKを日本語で教える。調べ学習は総合的な学習の時間を踏襲しグループで調べて発表

するがまとめはエッセイ形式で個々に書かせる(高校では日・英語で)。この方法により多様な知識のメニューを日本語で習得しつつ社会の中で協働でき、国外でも思考様式を共有してコミュニケーションできる人材を育てる事が可能になる。ポスト近代時代の和魂洋才モデルとして他国への適用も可能である(3つのIBのモデルのまとめは、日本国際バカロレア教育学会第一回大会の要旨を参照されたい)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

1. 渡邊雅子, 2014, 「国際バカロレアにみるグローバル時代の教育内容と社会化」『教育学研究』第 81 巻第 2 号: 176-186.
2. WATANABE, Masako Ema, 2015, “Typology of Abilities Tested in University Entrance Examinations: Comparisons of the United States, Japan, Iran, and France,” *Comparative Sociology*, 14(1): 79-101.
3. 渡邊雅子, 2015, 「大学入試でテストされる能力のタイポロジー アメリカ、日本、イラン、フランスの大学入試問題比較から」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』62(1): 1-13.

[学会発表](計 7 件)

1. Masako Ema Watanabe, 2016. “Styles of Reasoning and Framing Temporality in the United States, Japan, Iran, and France.” 111<sup>th</sup> American Sociological Association Annual Meeting, Seattle (Aug. 20, 2016).
2. Masako Ema WATANABE, 2014, “Globalization, Enculturation, and Acculturation in Education: Comparisons of Three Types of Baccalaureates, International Baccalaureate (IB), French Baccalauréate (Le Bac) and Option International Baccalaureate (OIB).” 日本教育社会学会第 66 回大会(英語部会) 松山大学(2014 年 9 月 13 日)
3. 渡邊雅子, 2015, 「大学入試で測られる能力の類型と社会のパラダイム アメリカ、日本、イラン、フランスの比較から」日本教育学会第 74 回大会 お茶の水女子大学(2015 年 8 月 29 日).
4. 渡邊雅子, 2016, 「日本発「ローカル IB (Localized IB)」モデルの理論と実践法 -3つのバカロレアとの比較から日本における IB 受容の教育・社会的意義を考える」日本国際バカロレア教育学会第 1 回大会 筑波大学(2016 年 9 月 24 日).
5. 渡邊雅子, 2017, 「日本型 IB の創設に向けて - 諸外国の IB 受容のパターン分析から」国際バカロレア教育シンポジウム-IB 導入の課題と展望-(早稲田大学 2017 年 7 月 22 日)

6. 渡邊雅子, 2017, 「フランスのことばの教育と思考表現スタイルに見る<深い学び>-「能力」と「教養」の対比から-」フランス教育学会第 35 回大会 放送大学 東京文京学習センター(2017 年 9 月 9 日)
7. 渡邊雅子, 2018, 「日本版大学の『知の理論』を提案する - 3つのバカロレアの比較から -」第 24 回大学教育研究フォーラム・参加者企画セッション「日本における大学版「知の理論」の可能性」京都大学(2018 年 3 月 21 日)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

渡邊 雅子 (WATANABE, Masako)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号: 20312209

##### (2) 研究分担者 なし

##### (3) 連携研究者 なし

##### (4) 研究協力者 なし